



菊池寛実記念 智美術館

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 4-1-35 西久保ビル B1F

TEL03-5733-5131 FAX03-5733-5132 <http://www.musee-tomo.or.jp>

プレスレビューのご案内は8頁をご覧ください。

展覧会に関するお問い合わせ 担当:花里・高田(☎03-5733-5131 / FAX03-5733-5132)

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、私ども菊池寛実記念 智美術館の活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。当館の次回展覧会「現代の名碗 一川喜田半泥子、加藤唐九郎、金重素山、三輪壽雪、岡部嶺男、鈴木藏、樂吉左衛門から若手作家まで」展のご案内をさせていただきます。

茶の湯の茶碗は桃山時代以来、400年以上の年月をかけて先人達が追及してきた日本独特の造形性をあらわす器です。一碗を喫する行為を禅的精神と同化させ用のあるべき様を探求した千利休は、無作為の作為を求めて長次郎にその造形化を託し、あるいはまた利休没後二十数年後には、稀代の数寄者本阿弥光悦が利休好みから離脱し、個性を表出させた侘び茶に適う茶碗を造り出しました。光悦の茶碗は豊かな人間性と心の自由を感じさせる造形ですが、個性の発露を近代的自我の現れとみることにもできるように思います。

「現代の名碗」展は、近現代の作家たちによる茶碗を通して、そこに映し出される個性、時代性を展望する試みです。川喜田半泥子(1878-1963)の茶碗をはじめ、石黒宗麿(1893-1968)、加藤唐九郎(1898-1985)、金重素山(1909-1995)、三輪壽雪(1910-2012)、岡部嶺男(1919-1990)など物故の作家から、鈴木藏(1934-)、鯉江良二(1938-)、十五代樂吉左衛門(1949-)、隠崎隆一(1950-)、金重有邦(1950-)、川瀬忍(1950-)、さらに30代の若き作家にいたるまで、42名の作家の茶碗をご覧ください。

敬具

■■■展覧会概要■■■

- 展覧会名 現代の名碗 一川喜田半泥子、加藤唐九郎、金重素山、三輪壽雪、岡部嶺男、鈴木藏、樂吉左衛門から若手作家まで
- 会期 2013年9月14日(土)～2014年1月5日(日)
- 観覧料 一般1,000円／大学生800円／小中高生500円
- 主催 公益財団法人菊池美術財団
- 協賛 京葉ガス株式会社
- 会場 菊池寛実記念 智美術館(〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-1-35 西久保ビル)
<http://www.musee-tomo.or.jp>
- 開館時間 午前11時から午後6時まで(入館は午後5時30分まで)
- 休館日 毎週月曜日(ただし9/16、9/23、10/14、11/4、12/23日は開館)、
月曜祝日の翌火曜日(9/17、9/24、10/15、11/5、12/24)
年末年始 12/28(土)～2014年1/1(水・祝)

○展示内容 出品作家およそ40名、出品点数およそ70点

展示替え:11月18日(月) 川喜田半泥子「粉引茶碗 銘 雪の曙」「刷毛目茶碗 銘 一声」(2点とも石水博物館蔵)、加藤唐九郎「鼠志野茶碗 銘 鬼ヶ島」は11月19日(火)からの展示となります。

川喜田半泥子(1878-1963)、河井寛次郎(1890-1966)、石黒宗麿(1893-1968)、
荒川豊蔵(1894-1985)、中里無庵(1895-1985)、金重陶陽(1896-1967)、
加藤唐九郎(1898-1985)、金重素山(1909-1995)、三輪壽雪(1910-2012)、
岡部嶺男(1919-1990)、藤平伸(1923-2012)、清水卯一(1926-2004)、辻清明(1927-2008)、
鈴木藏(1934-)、田中佐次郎(1937-)、鯉江良二(1938-)、金重慆(1945-)、岡田裕(1946-)、
小川待子(1946-)、黒田泰蔵(1946-)、高垣篤(1946-)、辻村史朗(1947-)、安食ひろ(1948-)、
中村康平(1948-)、西端正(1948-)、前田正博(1948-)、樂吉左衛門(1949-)、
隠崎隆一(1950-)、金重有邦(1950-)、川瀬忍(1950-)、兼田昌尚(1953-)、前田昭博(1954-)、
三原研(1958-)、今泉今右衛門(1962-)、伊藤秀人(1971-)、加藤高宏(1972-)、
新里明士(1977-)、和田的(1978-)、桑田卓郎(1981-)

■主な作品と見どころ



1 川喜田半泥子「井戸手茶碗 銘 さみだれ」1942(昭和17)年頃

稀代の数寄者、川喜田半泥子(1878-1963)が制作した井戸型の茶碗。型追いをせず、轆轤のリズムを生かした大らかな姿で、随所に作者の心の自由がしのばれる。見込が深く、高台脇から高台にかけての削りの潔さが最大の見どころ。



2 加藤唐九郎「鼠志野茶盃 銘 鬼ヶ島」1969(昭和44)年

窯出しの際、この一碗を残して他のすべてを割ったという逸話が残る。唐九郎(1898-1985)は、この茶碗によって「志野」を制作する確信めいたものを得たという。力作揃いのこの時代の唐九郎志野のなかでも突出した存在感をみせる。

展示期間:11月19日(火)~



備前焼の巨匠、金重素山（1989-1995）晩年の作。白く滑らかな肌に、赤い緋襷が映える。とくに緋襷のデザイン感覚は素山ならではの洒落たセンスである。豊かな腰と内に抱え込んだ口造りも魅力。素山は備前焼中興の祖・金重陶陽の弟で、兄の仕事を長く支えた。電気窯による緋襷焼成の成功は素山の功績。

3 金重素山「伊部緋襷茶盃」1989（平成元）年



昨年末 102 歳で亡くなった萩焼の重要無形文化財保持者・三輪壽雪が 96 歳のときに制作した茶碗。口径 16cm という大きさ、腰の豊かなたっぷりとした形状、荒々しく縮れる白萩釉の表情など、96 歳とは思えぬ力感漲る作行きである。高台も見どころのひとつ。

4 三輪壽雪「鬼萩花冠高台茶碗 銘 命の開花」

2003（平成 15）年



岡部嶺男（1919-1990）は、青磁の焼造技術を極め、独創性と両立させた先駆の作家。孤高のイメージが強く、作品からそのような印象を受けることも多いが、本作はしっとりとした釉調が人を惹きつける。厚い釉下にろくろ目をあらわす。薔薇の花の形に似た「バラ高台」も見どころの一つ。

5 岡部嶺男「天青瓷茶盃」1967（昭和 42）年頃



志野の重要無形文化財技術保持者・鈴木藏（おさむ 1934）の最新作。昨年あたりから茶碗の作風を展開させ、新境地を見せている。ろくろを使わず、粘土の板をぐるりと回して胴部をつくり、側面を篋で削る。その勢いが波打つ口造りにあられ、動感の強い造形となっている。

6 鈴木藏「志野茶碗」2013（平成 25）年



樂家15代吉左衛門（1949-）による茶碗。樂家は桃山時代に初代長次郎が千利休の創意を受け、わび茶のための茶碗を焼造して以来、400年以上にわたって手捏ねによる樂茶碗を手がけてている。当代は、「焼貫」技法に自らの個性を投じ、その作風は多くの陶芸家に影響を与えている。

7 樂吉左衛門「焼貫樂茶碗 銘 望舒」1994（平成6）年



現代の備前焼を代表する隠崎隆一（1950-）の新作茶碗。焼成中の降灰によってできた窯変の、岩肌を思わせるようなダイナミックな景色が見どころの一つ。備前の土のなかでも顧みられてこなかった土を主たる原料とし、焼成技術を駆使して、備前焼の未来をも見据える。

8 隠崎隆一「黒面取碗」2013（平成25）年



隠崎とともに備前焼の今と未来を担う金重有邦（1950-）の新作茶碗。備前の山土を用いた茶碗だが、焼成中の降灰により窯変が生じ、赤茶色の備前焼とは趣の異なる侘びた風情をみせる。焼き締めのため、水に親しむと色艶が変わる。

9 金重有邦「伊部茶盃」2013年



青磁作家のなかでも突出した技術と造形力を持つ川瀬忍（1950-）の新作茶碗。本展に合わせて、「翠瓷茶碗」を創生。宋時代に焼造された禾目天目のように、釉面に極細の白線が入る。翠玉を思わせる肌は、水深の深い湖を覗くようで吸い込まれそうである。

10 川瀬忍「翠瓷茶碗」2013（平成25）年

■ 展覧会関連行事

展覧会会期中、講演会、ギャラリートーク、西洋館見学会などの関連行事を開催いたします。

● 講演会・対談 当館 B1 階展示室にて

- ・ 講演会「現代の茶碗のあるべきようー出品作について」 9月14日(土)
講師 林屋晴三氏(東京国立博物館名誉館員)
- ・ 対談「出品作家と語る①」 10月12日(土) 講師 隠崎隆一氏+林屋晴三氏
- ・ 対談「出品作家と語る②」 10月19日(土) 講師 金重有邦氏+林屋晴三氏
- ・ 対談「出品作家と語る③」 11月2日(土) 講師 川瀬忍氏+林屋晴三氏
- ・ 講演会「高麗と和物の名碗を語る」 11月16日(土) 講師 林屋晴三氏

いずれも午後3時より(観覧料のみ、聴講無料)

● ミュージアム・コンサート in TOMO 当館 B1 階展示室にて

閉館後の展示室でサントリー室内楽アカデミーによるクラシックコンサートを開催いたします。

10月11日(金) 午後6時45分(開場6時30分) 事前お申込み制(定員=40名)
参加費=3,000円(観覧料・ワンドリンクを含む。当日観覧券をお持ちの場合は2,000円)

● 呈茶サービス 当館 B1 階展示室にて

対談開催日に出品作家によるお茶碗でお抹茶をお召し上がりいただきます。

10月12、19日(土)、11月2日(土) いずれも午後1時より2時45分まで
茶菓券=1,000円(観覧料別・美術館の受付でお求めいただきます)

● 学芸員による ギャラリートーク 聴講無料 いずれも午後2時より

9月21日(土)、10月5日(土)、11月9日(土)、12月7、14日(土)

● 西洋館見学会 (予約制・定員20名様)

9月28日(土)、10月26日(土)、11月30日(土) いずれも午前11時より

当館敷地内にある西洋館(登録有形文化財)は、大正時代に建てられた後、修復を重ねながらも建具等の室内装飾が丁寧に保全され、今日まで使用されている希少な建物です。通常、非公開の内部を上記の日程で限定公開いたします。

※西洋館のご案内(建築家 篠田義男氏による)、美術館観覧料(学芸員の解説付き)、レストラン ヴォワ・ラクテでのランチを含め、お一人様8,000円です。

■本展覧会について広報媒体へ掲載、取材をいただく場合、本リリースに紹介されている作品画像をデータでお貸し出しいたします。申込書のご希望の図版に☑を記し、用紙を返信のうえ、お問い合わせください。ご紹介いただく記事、番組内容については、情報確認のため校正の段階で事務局までお知らせください。お貸出しする画像データは本展覧会終了をもって使用期限とさせていただきます。作品の画像を1点以上ご掲載の上、本展をご紹介くださる媒体に対し、本展ご招待券を読者プレゼント用に提供いたします。申込書、所定の欄に招待券希望の旨を明記してください。

掲載に関するお問い合わせ先 菊池寛実記念 智美術館 (担当：花里、島崎)

TEL.03 (5733) 5131 FAX.03 (5733) 5132 <http://www.musee-tomo.or.jp/>

掲載・画像貸出申込書

返信先 FAX : 03 - 5733 - 5132

●貴社基本情報

会社名:	
担当部署:	担当者名:
住所:	
電話	ファックス:
E-MAIL:	

●媒体情報

新聞 雑誌	媒体名:	
	発行日:	発売日:
TV	媒体名:	
ラジオ	放送日:	放送時間:
ネット	URL:	

●画像貸出リスト ※キャプションには作者/作品名/制作年/撮影者(記載がある場合)を必ず入れてください。

希望作品に☑	作品キャプション
<input type="checkbox"/>	1 川喜田半泥子「井戸手茶碗 銘 さみだれ」 1942(昭和17)年頃 高さ9.5、口径14.6cm
<input type="checkbox"/>	2 加藤唐九郎「鼠志野茶碗 銘 鬼ヶ島」 1969(昭和44)年 高さ9.3、口径13.0cm
<input type="checkbox"/>	3 金重素山「伊部緋襷茶盃」 1989(平成元年)年 高さ8.8、口径13.8~13.0cm
<input type="checkbox"/>	4 三輪壽雪「鬼萩花冠高台茶碗」 2003(平成15)年 高さ11.0、口径16.0~15.3cm 山口県立萩美術館・浦上記念館蔵
<input type="checkbox"/>	5 岡部嶺男「天青瓷茶碗」 1967(昭和42)年頃 高さ9.3、口径14.3cm
	※ リリース内 6~10 の画像をご希望の場合はお申し付けください。

●読者プレゼント用チケット希望： 5組10名様 10組20名様

プレスレビューのご案内

展覧会の趣旨、作品解説など、内覧会に先立ちましてプレスの皆様にご説明申し上げます。
ご多用のなか恐縮に存じますが、どうぞご出席くださいますようお願い申し上げます。

菊池寛実記念 智美術館

プレスレビュー 2013年9月13日(金) 14:00～

14:00～14:45 展示室にて、作品解説などギャラリートークを行います。展示会場内ご撮影いただけます。

* 林屋晴三氏、和田的氏(出品作家)にお話しいただく予定です。

14:45～15:00 皆様からのご質問にお答えいたします。

会場： 菊池寛実記念 智美術館 〒105-0001 港区虎ノ門 4-1-35 西久保ビル B1

- ・日比谷線・神谷町駅出口 4b より徒歩 6分
- ・南北線・六本木一丁目駅改札口より徒歩 8分
- ・南北線/銀座線・溜池山王駅出口 13 より徒歩 8分
- ・銀座線・虎ノ門駅： 出口 3 より徒歩 10分

ご出席いただける場合は、下記フォームにご記入の上、FAXにて

ご返信下さい。 **返信先 FAX 03-5733-5132**

会社名：	
担当部署、氏名	
住所：	
電話：	FAX：
Email	